

2019年

秋の読書感想文・課題作文優秀作品

【小学部・読書感想文】

「スケッチブック」を読んで

センター北校 N・Aさん(南山田小)

絵を描くことが大好きな主人公、紗理奈は供養絵に出会う。そして、この供養絵で苦しみをかかえていた人物を笑顔にさせた。供養絵とは亡き者のための絵だ。この世を去った者がもし生きていたらと想像し、幸せに暮らして欲しいという願いを込めて描かれた絵なのだ。紗理奈の母親、綾は紗理奈が幼い時に病気で亡くなっている。綾も供養絵を描いていた。それに対して紗理奈のおばあちゃんは綾が供養絵を描くことを反対していた。

もし私がおばあちゃんの立場で、綾が供養絵を描くことに反対していたら、綾の供養絵を描く姿も見たくなかっただろう。それに、必要な道具を全て捨てて二度と描かないように言っていたと思う。だが、私はおばあちゃんの気持ちに反対だ。なぜなら、絵を描くことが好きなら、好きなことをやればいいと思うからだ。私は紗理奈みたいに供養絵を描いたことは一度もない。しかし、この物語の中では紗理奈が書いた供養絵を見て、感動している人物がいる。私は今まで自分ができる何かで人に喜びや幸せを与えたという自信がない。だが、この本を読んで私も紗理奈のように人に役立つ人間になりたいと思った。例えば、バスや電車の中で席をゆずるといような身近なことでもできる。また、歌の合唱や合奏などで感動させることもできるだろう。簡単にはいかないだろうが、少しずつやっていくうちにいつかは成果が出ると感じている。

この本を読んで、自分ができる何かで人の役に立つことができるということを学んだ。誰かの役に立てれば私もいっしょに喜べる。だから、大人になっても役に立てるように努力することを続けたい。そして、一人一人の小さな笑顔が大きくなって世界中に広まって欲しい。

「のび太という行きかた」を読んで

中山校 T・Yさん(中山小)

「ドラえもん」は海外でも人気の高い名作である。その誰もが知っているマンガ「ドラえもん」の登場人物である「のび太」の生き方が書かれている「のび太という行きかた」という本を読んだ。

そののび太について、多くの人が成績が悪く、運動もできず、いつもお母さんや先生に叱られ、友達からはいじめられてばかり、そんなダメな男の子を想像するだろう。だが、「のび太という男の子は人生を上手に歩んでいる。」と筆者は述べている。そんな、のび太の人物や性格が知れる本だ。

私は、バスケットボールクラブに入っている。横浜市小学校から集まった友達と楽しくバスケットをしている。今はそのクラブのゲームキャプテン、背番号4番をつけている。だが、ゲームキャプテンは責任重大。ときには「おまえのせいで試合で負けたんだ」とコーチに怒鳴られることだってある。そんなとき、いつも自分は落ち込んでしまう。ところが、のび太は何を言われても絶対にあきらめない。落ち込んでも、すぐ立ち直る。そして一心不乱になって何かにうちこむ。そんなのび太のくじけない心は、私に決定的に足りないものがある。たとえ何があっても、自分の目標に向かって進んでいき「くじけない心」をみがいていきたいと思う。しかし、今の自分には一心不乱になってうちこむことができるものがない。だからまず、それを探さなくてはならない。「ほかのものが目に入らないほど集中力をもって目標にうちこむことで『くじけない心』はさらに強さを増すことができる」と筆者は述べている。だから、たくさんチャレンジして目標を見つけようと思う。

私はこの本を読んで、たくさんチャレンジして、一心不乱になってうちこめるものを見つけ、それでやっと「くじけない心」がみがけるということを学んだ。私は、のび太のような立派な人になりたい。

【中学部・課題作文】

センター北校 A・Uさん（中川中）

私が思うグローバル化時代とは、自分の国の伝統を大切に守り、その上で他国の文化も受け入れられる時代のことだ。いよいよ来年には東京オリンピックが開催される。そして、さらにたくさん外国人が来日する。ここでは、どのような力が必要になるのだろうか。

グラフAとグラフBの共通点は、語学力が上位に入っていることだ。確かに、世界共通語としての英語の力がなければ、留学した時に自分の目的を果たすことや外国人とコミュニケーションを取ることもできない。しかし、これからのグローバル化社会で私たちがより求められていることは、語学力よりもむしろ主体性・積極性だということがグラフBから分かる。これは、自分の意志と判断で、自発的に責任を持って行動することだ。私の家の隣にはインド人、さらに隣にはドイツ人が住んでいる。私の母は彼らと会話をしているが、私はまだうまく話すことができない。簡単な英語なら学校でも勉強していて話せるはずなのに、何を話したらよいのか分からず、ただうなづくのみになってしまっていることが多い。資料Aと資料Bを読み比べてみると、資料Bのほうが言葉の意味だけでなく、その背景も詳しく説明している。日本に来る外国人は、より深く日本文化について知ることを望んでいると思う。だからこそ、私は資料Bのように説明できるのが理想だと思う。しかし、たとえ日本語でも「いただきます」の背景まで詳しく説明することは今の私にはできない。

今回の課題を通して、今の私に不足するところ、これからどのような力を付けていきたいかが明確になった。それは語学力はもちろんのこと、まずは土台となる様々な知識、自分の国について深い知識を得ること、そしてそれを自ら発信したいと努めることだ。私はこれらの力を確実に身につけたい。五年後ではなく、まずは隣のインド人と臆せず会話することからチャレンジしたい。

長津田校 S・Kさん（田奈中）

これからのグローバル化時代に周りが私達に求めるものは何だろうか。まずそれを考えなければ、私達がグローバル化時代に活躍するのは難しいだろう。グラフBでは海外経験を有する若者に期待するもの、グラフAは学生が留学で得たものを示している。いわばこれは、私達若者の意識と企業の意識の差を表すものではないかと私は考えた。グラフBを見ると、一番に主体性・積極性が求められているのがわかるが、グラフAでは登場しない。一位に海外生活体験、二位に語学力がある。つまりほとんどの留学生が求められるものを得られていないということだ。確かに語学力は重要だが、それ以上に主体性がなければ語学力は生かされないだろう。このことから私は、今最も求められているであろう主体性・積極性を身に付けていきたいと考えた。そして、この資質はあらゆることに必要である。例えばこの資料のような説明を外国人にしなければならぬようなケースでも同様だ。私は、五年後の自分も同じような質問を受けたときには資料Bのような説明に挑戦したい。しかし五年後の私がこのレベルの説明を咄嗟にできるかはわからない。だからあくまで「挑戦」だ。より高い語学力、コミュニケーション力、そしてチャレンジ精神などもまた、私達に求められてくる。私はこれからの五年間を、世間や企業から求められる能力を考え、身につけられるようなものになりたい。五年後の自分に期待して、よりレベルが高いと感じた資料Bを選んだと言えるかもしれない。

今回の課題への取り組みを通し、私にはやはり主体性・積極性が欠けていると感じた。それらを改善するために、議論や話し合いなどの自らが考えなければならぬ場で受け身だけにならないようにしたいと思う。私は特に議論の場が苦手で、いつも意見が言えずじまいだが、それでは主体的とは程遠い。何事にも果敢に挑戦し、己の資質を自らの意思で高めていきたい。